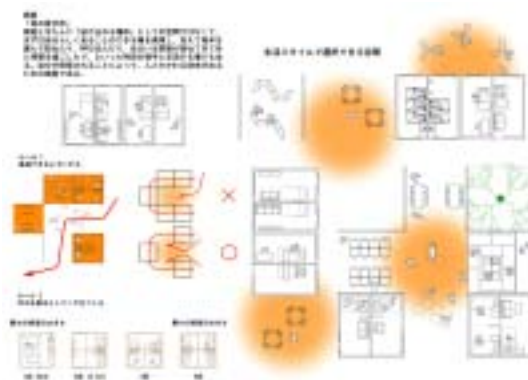




東京電機大学 工学部 建築学科

東根 章悟

病院とは本来、疾病の治療だけでなく、その中で快適な生活が過ごせるように配慮されるべきはずの施設である。さまざまな施設の中でも 24 時間生活する施設は病院以外ない。生活にもっとも関係の深いリハビリ施設を題材に、1 日の内で医療行為の 1 時間を除いた 23 時間をどのように生活させるか考え提案した。ほとんどの時間を病室で生活することが多く、病院内での居場所がないことが大きな問題である。そこで身の置き所として自分らしくあることのできる場（病室）を保障し、それ以外の生活の場を通過動線でしかなかった廊下に新たな生活の場を移すことにした。そこでは利用者によって違う出来事が起こり、1 人 1 人の自然な生活をつくり出すことを目指した。



講 評

「睡眠を含めた 2 3 時間をどのように過ごすかを考え、医療行為以外での生活する場を計画した」 リハビリテーション病院のあり方を、管理側の視点による従来の部屋と廊下の関係から、患者の視点による新たな空間作り、部屋 = 身のおき場所、道（廊下）= 新たな生活の場、として計画する提案である。5 室 1 単位をユニットとする病室グループは、リハビリ、診療施設のほかに学習、スポーツ等さまざまな施設がちりばめられて、平屋の地域コミュニティセンターのような病院を形成する。光を透過する大屋根の下、赤や黄色のサインカラーを持つ各施設と中庭の緑が透けて、透明なシークエンスのある明るく魅力的な生活の場としての病院環境作りへの意図が伝わってくる。

しかし、プランの複雑さ = 分かりづらさや外部空間との関わり（見せる庭よりリハビリやリフレッシュ空間として使える庭として）、患者はもとより医師やセラピスト、開放時の一般市民等のアクティビティが今ひとつ伝わり難い点等、もう少しつめれば説得力ある作品となっただけに惜まれる。

[審査員 柳田 富士雄]